

令和元年度 学校評価報告書（総表）

令和 2 年 5 月 29 日

1 学校の概要			
学校名	筑波大学附属小学校	校長名	甲斐 雄一郎
幼児・児童・生徒数	750	学級数	24
2 教育目標等			
① 学校教育目標	<ul style="list-style-type: none"> ○人間としての自覚を深めていく子ども ○文化を継承し創造し開発する子ども ○国民としての自覚をもつ子ども ○健康で活動力のある子ども 		
② 学校経営方針	<ul style="list-style-type: none"> ○全校職員の協力のもとに全人教育を目指す。 ○グローバル人材育成のための先進的教育を目指す。 ○インクルーシブ教育システムにおける教育モデルの開発・実践に取り組む。 ○第 3 期中期計画に積極的に取り組み、小・中・高と大学との連携に基づく先導的研究（小・中・高一貫カリキュラム開発と実践プログラム）を行う。 ○本校の特色である小学校における「教科担任制」を充実させ、実験的・実証的に授業を展開し、「公開授業研究会」の開催、「教育研究」誌の刊行等を通して、これからの日本の小学校教育モデルをつくる。 ○現職教育の拠点校を目指すと共に、海外に積極的に教育実践の発信を行ったり教育技術交流を行ったりして、小学校教師教育の国際的拠点校をめざす。 		
③ 重点目標	<ul style="list-style-type: none"> ① 全人教育をめざす 小学校では、教科内容を発展的に学ぶ態度を育成するとともに、運動や体験的な活動を重視し、知・徳・体の統合的な教育を推進する。 ② グローバル人材育成のための先進的教育をめざす。 国際理解教育、英語教育、情報教育等の観点から、グローバル人材育成のための方向性を探る。整備された ICT 教室、図書室等の積極的活用と研究を推進する。 ③ インクルーシブ教育システムにおける教育モデルの開発に取り組む 附属 11 校と連携を図りながら、インクルーシブ交流の教育モデルの開発に協力する。 ④ 第 3 期中期計画に積極的に取り組む 小・中・高の連携を深めると共に、一貫カリキュラム開発研究を行う。 ⑤ 小学校での教科担任制の授業をめざす 小学校における「教科担任制」の試みを充実させ、教科教育における目標・内容・方法の充実と、これからの日本の小学校教育モデルをつくる。 ⑥ 教職教育の拠点をめざす 全国の小学校教育のモデルになるような試みを行う。「公開授業・研究会」の開催、「教育研究」誌の刊行、「各地研究会・研修会」への協力等を行う。 教員免許状更新講習に当たり、6月に1回、7月に1回、9月に1回、合計年3回講習を開き、積極的に取り組む。 小学校教職課程の設置に伴い、本校で教育実習の充実に努める。 ⑦ 国際教育協力の貢献をめざす 引き続き JICA や APEC への協力を行うばかりでなく、韓国、タイなどのアジアにおいて、算数、理科、体育及びそれ以外の教科での「授業技術交流会」も開催し、小学校教育の国際的拠点校をめざす。また新たに交流を始めた北欧の研究会ではデンマーク、スウェーデン、スイス、さらにポルトガルからの新たな依頼もあり、算数、理科の合同研究会の企画を継続して行う。 デンマークからは正式な提携の依頼もあり、今後も継続的に取り組んでいく予定である。 		

<p>④ 前年度（平成 30 年度）の成果と課題</p>	<p>① 先導的教育拠点として これまで小・中・高の連携を深めながら一貫カリキュラム開発研究を行ってきた。これらは四校研活動報告「筑波大学大塚地区プランをめざして」としてまとめられた。これを受けてさらに平成 28 年度から 29 年度と「グローバルな素養を育てるカリキュラム研究」に着手した。平成 30 年度は、この新たな視点を付加したカリキュラムの中間報告を行った。さらに、小学校においては独自の「きめる学び」というテーマのもと子どもの意思決定の瞬間に着目した授業改革に取り組み、特色の一つでもある「教科担任制」を活かした研究を継続し、小学校教育の新たなモデルとなるようその成果を年 2 回の研究会等で発信することを継続していく。</p> <p>② 教師教育拠点として 初等教育の理論と実践についての研究をすることにより、その成果を一般小学校教育の参考に供した（「研究紀要」No.73 参照）。 各教科・道徳・総合活動・外国語活動に関して、教材開発、指導法、教具等の開発をし、本校発刊の月刊誌「教育研究」や、学習公開・研究発表会（6 月 15・16 日）、初等教育研修会（2 月 8・9 日）を開催して発信することができた。また、筑波大学初等教育コースの学生や看護学類生の教育実習に協力した。さらに、全国各地から派遣される現職教員研修生、及び海外教員の研修生に対して、教育研修、研究実践、協同研究等の講師として指導・助言を行った。 筑波大学の教員免許状更新講習に積極的に取り組み、約 120 名の受講生に講義と試験を行い、授業を中心とする講習に好評を得た。</p> <p>③ 国際教育拠点として 平成 30 年度も、JICA の関係者や、APEC の関係者、さらには韓国、オーストラリア、スウェーデンなど、諸外国の約 200 名以上の参観者があった。10 月には、韓国光州市、水原市、全州市にある初等学校で本校の 4 名の教員が授業、協議、講義を行い、協同で「授業技術交流会」を開催した。9 年間継続してきた「日韓授業技術交流会」は好評で、今後も続けていく予定である。2 月には韓国から約 30 名の研修生を受け入れ、本校において授業研究会を行った。また、北欧諸国との授業研究交流会にも継続して着手し、スウェーデン、デンマーク、スイスで研修会を開催した。さらにポルトガルからの提携の申し込みもあり、検討しているところである。</p> <p>④ その他 現職教育の一環に、地域協力として、文京区教育委員会の主催する学力向上プログラムへの協力、近隣校の教員の日常的授業参観受け入れを始め、日本国内からの研修の受け入れ等を実施した。 30 年度は約 900 名の参観者を受け入れ、本校の教育実践を紹介した。 特別支援教育との連携に関わって、附属大塚特別支援学校と協力し、保谷教場における合同の芋掘り行事を例年通り継続して行っている。また、本校児童が大塚特別支援学校の行事に参加し交流も行った。 32 人学級への対応、国際理解教育、英語教育、情報教育等の観点からのグローバル人材育成のための方向性を探るために、資料集めを行った。今後は、迫る東京オリンピック・パラリンピックへの教育と関連した教育プログラムの開発にも、これまで通り意欲的に取り組んでいく予定である。</p>
------------------------------	---

3 重点目標達成についての総括的評価

グローバル教育の取り組みとして、令和元年度も4年生を対象としたハワイ大学での「STEMS 2」プログラムへの参加体験、ハワイ大学附属小学校との交流会を行った。昨年度に引き続き、大学での講義だけでなくワイキキ小学校の児童との交流会に加え、ホノルル動物園でのオリエンテーリングも実施することができた。そのため、現地の方々との自然な交流体験もでき、児童のグローバル素養を高めることができた実感している。現在、ワイキキ小学校との話し合いにより、お互いの児童がホームステイできる計画を検討中である。

また、5・6年生の筑波大学の留学生との交流、3・4年生の三浦海岸合宿への参加、大塚特別支援学校との交流など本校だけに留まらない様々な人々との触れ合いにより、全人教育につながる活動ができたと考えている。

海外の教師との交流会としては、韓国の教員との授業研究会の取り組みを令和元年度も計画していたが、日韓の政治的な軋轢の影響もあり、今回の開催を見送ることになったことは、大変残念なことだった。令和2年度には再開の見込みであったが、新型コロナウイルス感染症感染拡大により、令和3年度の再開を目指すことになった。

理科部と算数部は、北欧のデンマークの教員との授業研究会を平成26年度から継続している。令和元年度にはポルトガルでの開催も実現でき、教育研究のネットワークがさらに広がりつつある。

国内においても、本校の公開研究会に参加された全国都道府県の教育委員会の方から、各地域の研修会、県大会などにおける本校教員の講師派遣にかなりの依頼があった。それらの成果やエビデンスは、各地区で発行している「研究紀要」や「研究集録」で確認できている。

これらの研究成果は、教育雑誌『教育研究』や研究紀要等で全国に発信している。

4 令和2年度の学校課題

本校の教育研究のシステムは、それぞれの教科の独自性の共生・共創によって保たれてきたと言える。しかし、独自性が高いがゆえに、教科横断的な指導カリキュラムの構築が難しい現状になっていたことは否めない。

そこで、総合活動部が中心になり「STEM+」（ステム・プラス）のカリキュラム編成をめざし、教科横断的な指導法の研究に取り組んでいる。さらに本年度は、文部科学省の「カリキュラム研究開発学校」の指定を受け、多くの教科を取り込んだ新しい総合的なカリキュラム編成へと発展させていく。

海外教師も対象にした教師教育拠点、そして国際教育拠点としての責務を果たすためのこれまでの活動は、経費的な問題があり、その予算をどこから確保するかが大きな課題となっている。

そこで、令和2年度においては、国内における教師教育拠点校、先導的教育拠点校としての役割をもう一度見直し、国際教育よりも重点的に取り組んでいくことにした。国内リソースの様々な活用を工夫することによって、児童のグローバル素養を育てる試みはいろいろとできるはずである。しかし、外国語を用いる活動などは、何よりその目的意識を明確に持たせていくことが大切になるため、留学生に協力を仰ぐことや国内の交流先を探すことなどが課題である。

5 学校課題に向けての具体的な取り組み

教師教育拠点校としては、筑波大学の初等教育学コースとの連携を密にして、大学生の卒業後の研修体制を3年間保証するなど、「教育実習から経験3年次研修まで」を視野に入れた教師育成プログラムを今後確実なものにしていくことを検討中であった。そこで、来年度には実行に移すために具体的な計画を立てることにする。

また各地域の教育委員会と連携を密にし、全国レベルでの行政とのタイアップをはかり、日本の教師の質の向上に積極的に寄与していける制度を創りあげていくことも進めていくことにしている。

予算確保の課題については、海外の主催者側の予算化を依頼するなどして、個人負担額を減らす努力をしていきたい。

6 成果物一覧（出版物・紀要・書籍等）

- 『研究紀要』第75集（著：筑波大学附属小学校・一般社団法人初等教育研究会）
- 『教育研究』平成31年5月号～令和2年4月号（編集：筑波大学附属小学校・一般社団法人初等教育研究会）
- 『子どもの数学的な見方・考え方が働く算数授業 1年～6年』（企画・編集：算数授業研究会）東洋館出版社
- 『板書で見る 前単元・全時間の授業のすべて 算数 1年上～6年上』（筑波大学附属小学校算数部企画・編集）東洋館出版社
- 『絶対楽しい家庭科授業』（横山みどり・楽しい家庭科の授業を考える会 編著）東洋館出版社
- 『できる子が圧倒的に増える！お手伝い・補助と一緒に伸びる筑波の体育授業』（著：筑波大学附属小学校体育研究部）明治図書
- 『1時間に2教材を扱う組み合わせ単元でつくる筑波の体育授業』（著：筑波大学附属小学校体育研究部）明治図書
- 『考え、議論する道徳に変える教材研究&授業構想の鉄則35』（著：加藤宣行）明治図書
- 『スポーツ場面で考える白熱道徳教室 1～3』（編著：加藤宣行）汐文社
等

学 校 評 価 （ 自 己 評 価 ） 報 告 書 （ 項 目 別 表 ）

令和元年度

学校名

筑波大学附属小学校

項番	評価項目	具体的評価結果
1-1-1	説明、板書、発問など、各教員の授業の実施方法	<p>本校では、月1回の校内研究会における授業研究、さらに有志による授業交流会が自主的に開催され、自由な雰囲気の中での情報交換が常時行われている。そのため、教師の指示・説明・発問、板書力といった教育技術の向上は、本校の研究の中で培われている。</p> <p>また、各教科の特性、教師の個性を尊重し、仮説検証型の研究スタイルにこだわらない多様な研究手法を導入することで、各教科・各教師の独自性を生かした研究が進められている。</p>
1-1-3	体験的な学習や問題解決的な学習、児童生徒の興味・関心を生かした自主的・自発的な学習の状況	<p>「主体的・対話的で深い学び」の実現のために、導入部分での児童の問題意識を高める指導を重視した授業づくりを大切にしてきた。また、教材開発はもちろん、学習形態の工夫、ICT機器の有効な活用により、共同的な学びの実現を図ることができた。</p> <p>本校では教科担任制をとっているが、それぞれの専門分野を超えた議論が校内研究会などの研修を通して、児童の興味・関心を高めた自主的・自発的な学習を実現することができた。</p>
1-2-2	児童生徒の学力・体力の状況を把握し、それを踏まえた取組の状況	<p>日常の授業における児童の評価、さらに文部科学省の「全国学力・学習状況調査」「新体力テスト」等の結果では、本校の児童の体力の高さ、学力については、相対的によい傾向を毎年示している。</p> <p>しかし、探究し続ける力、さらに教科によっては意思決定場面における資質・能力には個人差があり、解決に向けた具体的な指導が求められている。そのため、総合的な学力・体力の育成のため、2年前から本校独自の総合学習「STEM+（ステンプラス）」のカリキュラムを開発し、指導に当たっている。</p>
3-1-2	問題行動への対処の状況	<p>各学級で生じた児童の問題行動については、担任学年部や専科との情報交換はもちろん、早い段階で専門家（スクールカウンセラー等）と情報を共有し、保護者とまめに連絡を取り合いながら解決に当たっている。</p> <p>また、児童指導会議を職員会議に組み込み、月2回定例化して開催している。多くの教師間で情報を共有することで、組織的に問題を解決できるようにしている。状況によっては、附属学校教育局の協力を仰ぎながら指導に当たってきた。</p>
3-2-1	自ら考え、自主的・自立的に行動でき、自らの言動に責任を負うことができるような指導の状況	<p>「つくばっ子の追究」という総合活動のイベントがある。学級予選を勝ち上がってきた児童たちが、全校生の前で、これまで追究してきた学習の成果を発表している。様々な発表に触れる中で多くの児童が、問題を見いだすための視点や、追究の手順や方法、さらに、プレゼンテーションの技術を学ぶきっかけとなった。</p> <p>また、通学分団や縦割り清掃など児童の自治活動の場を設け、自らの判断でよりよい学校生活、安全な登下校、通学マナーの確立なども継続して考えさせてきた。</p>

4-1-3	法定の学校保健計画の作成・実施の状況、学校環境衛生の管理状況	<p>保健主事の養護教諭と保健担当の主幹教諭が中心となり、毎月行われる保健部会において計画の遂行状況を確認し、児童への指導、担当各教諭への連絡を随時行った。</p> <p>新型コロナウイルス問題では、学校医の指導を受けながら感染防止計画を立案し、全職員の協力のもと感染防止の準備を進め、実行することができた。</p>
5-1-4	危機管理マニュアル等の作成・活用の状況	<p>「防災・防火計画」をもとに、避難訓練、防災訓練による児童の指導だけでなく、教師や保護者向けの救助訓練も実施し、緊急時の役割分担、連絡体制の見直しをした。</p> <p>さらに、宿泊を伴う「清里合宿」でも現地で必ず避難訓練を行い、学校外の活動においても児童に緊急時の対処の仕方についての指導、意識づけを図った。</p>
6-1-1	特別支援学校や特別支援学級と通常の学級の児童生徒との交流及び共同学習の状況	<p>令和元年度も、大塚特別支援学校と本校の3年生とで、西東京市にある保谷田園教場におけるジャガイモ堀等の交流活動を行った。</p> <p>また、本校児童が大塚特別支援学校に2回出向き、体育館での共同学習やゲーム等のレクリエーションなども実施することができた。</p> <p>また、3年生と4年生が三浦海岸合宿へ参加し、互いの個性やよさを認め合い、助け合う活動を通して、他校の附属学校の子どもたちと交流することができた。</p>
11-1-1	学校運営へのPTA（保護者）、地域住民の参画及び協力の状況	<p>若桐会、後援会における学校への支援活動は、他に類を見ない強力な体制である。特に、夏休みの水泳学校や若桐祭の企画・運営、学校の広報誌づくりなど、積極的に学校運営をサポートしていただいた。</p> <p>また学校評議委員会では、地域の方、本校のOB、大学など有識人などに関わっていただき、多様な視点からのアドバイスをいただくことができた。</p>
14-1-1	入学者選抜	<p>毎年4000人弱の入学者希望者に対する考査では、第一次試験の抽選で本校の受験キャパシティに見合う人数まで調整し、第二次試験では主に生活行動能力等を重視して観察した。</p> <p>さらに、公平性を高めるために、第三次試験では、検査合格者200名の中から、定員となる128名（32名4学級）を2回目となる抽選で選出した。</p>
14-1-2	大学との連携・協力	<p>四校研では、小学校、中学校、高校、大学の各教科専門家で集い、一貫教育の具体的なカリキュラム編成について議論することができた。教科によっては交換授業もこれまで行っており、互いの児童の学習状況を理解しあうことができている。</p> <p>また、本校の研究発表会（6月）においては、教科・領域によっては、分科会指導助言者として附属中・高の先生方や筑波大学の先生方に参加していただき助言を受けた。</p>
14-1-3	先導的教育研究	<p>毎月1回の校内研究会では、研究授業を行った。研究テーマ「『きめる』学び」に基づき、その具体的な指導方法についての研究授業を繰り返しながら、研究の成果や課題を明らかにすることができた。</p> <p>その成果を研究紀要にまとめ、6月の研究発表会で発表した。さらに、月刊誌『教育研究』等で広く教育現場に提案することができた。</p> <p>新しいテーマ「『美意識』を育てる」での研究もスタートさせることができた。</p>

14-1-4	教員養成・教師教育	<p>6月、7月、9月の合計3回の教員免許更新講習を開催した。本校教師と児童による実際の授業を参観することができ、その事実をもとに研修を深めることができた。受講者からは好評を得た。</p> <p>6月「研究発表会」と2月「初等教育研修会」には、全国から多くの先生方が参加され、様々なご意見や感想をいただくことができた。今後の研究に生かしていきたい。</p> <p>成果の一つとして、各都道府県教育委員会からの視察に加え、講師依頼を多く受けている。現地に赴いて本校教員が指導をする中で、これまでの研究成果を広く発信することができた。</p>
14-1-5	国際交流・国際貢献	<p>4年生の希望者を対象とした「日米児童交流会」では、ハワイ大学STEMSプログラム参加、ハワイ大学附属高校、ハワイ大学附属小学校、ワイキキ小学校との交流会を行った。</p> <p>また、5年生と6年生は筑波大学留学生との交流会を通して、グローバル素養の育成を目指す活動を継続して行っている。</p> <p>さらに、海外の先生方の研修の場として授業参観の機会を設けたり講座を担当したりして、教員のグローバル資質向上の機会ともなった。「日韓授業交流会」は、諸事情で中止となってしまったが、今後とも継続していく考えている。また、自費ではあるが、「北欧授業研究会」も継続しており、本年度はデンマーク、スウェーデンに加え、ポルトガルでの授業研究会も開催することができた。</p>
14-1-6	社会貢献	<p>東京23区内の公立・私立学校で開催される研修会の講師をはじめ、学習指導要領の委員や学力テストの問題作成委員、分析委員等、文部科学省関係の多くの事業に協力した。</p> <p>また多くの教員が各県、地域の教育委員会の講座、各学校の校内研究会への講師としての派遣依頼があり、各地域の教師教育に貢献することができた。</p>